

令和元年6月23日現在

機関番号：23603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01883

研究課題名(和文) 幼児の姿勢と運動技能の拙劣さを客観的評価に基づいて改善する保育方法の開発

研究課題名(英文) Development of a childcare method to improve the prejudice of posture and motor skills of preschooler based on objective evaluation

研究代表者

前田 泰弘 (MAEDA, YASUHIRO)

長野県立大学・健康発達学部・教授

研究者番号：10337206

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幼児の姿勢や運動技能を改善する保育方法を開発するため、幼児の運動技能と身体コントロールおよび感情コントロールとの拙劣さとの関連について調べた。その結果、保育者が気になる行動を示す幼児の多くは、身体コントロールと感情コントロールに拙劣さを示す、幼児は、身体と感情の双方ともコントロールが良好、双方とも拙劣、どちらかが拙劣の4タイプに分類できることが分かった。このことから、身体コントロールの不器用さと感情のコントロールの拙劣さを客観的指標として、その発現のタイプに応じた保育方法を検討できる可能性があることを指摘できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

保育の場には「安定した座位が取れない」「動きが大きい」など姿勢の保持や運動のコントロールに拙劣さを感じる幼児がいる。これらの改善には、姿勢や動きを作る身体感覚(バランス感覚や力を調整する感覚など)を含む運動技能(動き)の体験を重ねることが有効である。一方、運動技能は保持されているが、多動性や衝動性などの感情コントロールの拙劣さによりそれが雑になる幼児もいる。本研究の成果は、幼児の運動技能の拙劣さが身体と感情コントロールのいずれかに起因するかを明らかにできる指標になるものであり、これを用いることで動きづくりなどの保育活動を、幼児の特性に合わせて考える上での資料になるものである。

研究成果の概要(英文)：To develop the childcare method to improve children's postures and motor skills, we studied the correlation between the children's motor skills and the clumsiness of their motor control and the difficulty of emotion control. The results are the following two: 1. Most of the children that nursery teachers worried about behaviors have clumsiness in their motor controls and difficulties of emotion control. 2. We could divide the children into four types from the clumsiness of motor skills and the problem of emotion control. These results implied that the clumsiness of motor control and the difficulty of emotion control could be adopted as the objective indicator to develop the childcare method that we targeted.

研究分野：臨床発達心理学

キーワード：気になる幼児 保育方法 運動技能 不器用さ 身体コントロール

1. 研究開始当初の背景

保育所や幼稚園には、知的能力や運動能力に大きな遅れや偏りが無いにもかかわらず、保育中に「いつもごろごろしている」「良い姿勢を保てない」「遊びや活動への集中が続かない」など、気になる行動を示す幼児(以下、気になる幼児)がいる。申請者らはこれまでの研究において、気になる幼児の多くには身体感覚の偏りがあることを報告してきた(たとえば、前田・小笠原, 2009; 前田・小笠原, 2011)。そして、幼児の身体感覚の偏りを保育者が客観的に評価し、その改善に向けた保育を保育者自身が計画・実践できる方法の開発を検討した。その結果、気になる幼児には高率で何らかの身体感覚の偏りがあることに加え、行動では姿勢の保持や運動コントロールが拙劣であるという特徴が明らかとなった。姿勢の保持と運動コントロールは、身体感覚では、バランスやスピードに関連する前庭感覚や力のコントロールに関連する固有受容覚が調整しており、気になる幼児では全般的にこれらの身体感覚に偏りを示すことがわかっている(前田・小笠原, 2014)。さらに、それらの拙劣さの改善により、外界の気づきやそれとのかかわり、他者との相互作用が改善されることが分かった(前田・小笠原, 2015)。このことから、気になる幼児に対しては、姿勢の保持や運動コントロールの拙劣さの改善を図る保育方法の開発が急務であると考えられた。一方で、保育現場においてはこれらの保育方法を検討するための視点や発達評価(効果測定)を行うための客観的指標が十分でなく、保育者それぞれの経験にゆだねられている現状があった。

<参考文献>

- 1) 前田泰弘・小笠原明子 (2009) 身体感覚の改善を基盤とした発達が気になる幼児の「育ち」の支援。乳幼児教育学研究, (18), 19-29.
- 2) 前田泰弘・小笠原明子 (2011) 保育園における幼児の気になる行動と身体感覚の偏倚の関連性。東北福祉大学研究紀要, 35, 147-155.
- 3) 前田泰弘・小笠原明子 (2014) 4・5歳児の気になる行動の発達的特徴。日本保育学会第67回大会発表論文集。
- 4) 前田泰弘・小笠原明子(2015)幼児の気になる行動と身体感覚の高寄りとの関連。保育文化研究, 第1号, 27-37.

2. 研究の目的

本研究は、保育所や幼稚園での保育に苦慮される発達が気になる幼児を中心的な対象として、その多くが示す姿勢保持と運動コントロールの拙劣さを、保育者自身が客観的に評価し、その改善・向上のための保育活動を計画・実践するための手法を開発することを目標としている。本研究では、その一環として以下の3点について明らかにすることを目的とした。

保育者が気になる幼児の行動の発達的特徴

保育士を対象に、気になる幼児の行動を調査し、環境とのかかわりの拡がりの観点から分析する。この結果をもとに、保育者が気になる幼児の行動に効果的に配慮を行うための視点を明らかにすることを目的とした。

保育者が気になる幼児の行動と運動技能の拙劣さの関連性

の研究において、気になる行動を示す幼児についてはセルフコントロールの改善が必要であることが示された。そこで、気になる行動をセルフコントロール(身体コントロールと感情コントロール)の拙劣さの観点から分析し、保育者が気になる幼児の程度との関連性を検討する。また、その拙劣さと運動技能の拙劣さとの関連性についても検討することとした。

気になる幼児の運動技能と身体と感情のコントロールの拙劣さとの関連性

の研究では、幼児のセルフコントロールを身体と感情のコントロールに分け、それぞれの拙劣さの発現の諸相と運動技能の拙劣さの関連性を検討する必要性が示された。そこで、保育の中で見られる幼児の気になる行動を、身体コントロールと感情コントロールの拙劣さに分け、その発現の様子から気になる幼児を分類した。さらに分類した群について、保育で行われる運動技能(運動あそび)の拙劣さとの関連性を検討した。

3. 研究の方法

保育者が気になる幼児の行動の発達的特徴

【対象】A県の保育園(3園)に在籍する保育士53名を対象とした。

【手続き】担当する3~5歳児の気になる行動を調査紙に自由記述するよう依頼した。集計されたデータについて、気になる行動を年齢別に整理しさらに前田・小笠原・酒井・守(2015)による先行研究に準じて、内容をKJ法で分類した。分類された気になる行動(群)を環境とのかかわりとの拡がりの観点から3群(セルフコントロール、環境への気づき・適応、環境とのかかわり)に分け、年齢ごとに発現状況を検討した。

保育者が気になる幼児の行動と運動技能の拙劣さの関連性

【対象】A県の保育園(3園)に在籍する2歳クラス児54名、3歳クラス児63名、4歳クラス児47名、5歳クラス児54名とクラス担当の保育士を対象とした。

表1 保育で見られる気になる行動

- | |
|--|
| a. 姿勢が崩れやすい、姿勢を保てない。
b. 落ち着きがない。
c. 手先を使うことが苦手。
d. 気持ちのコントロールが難しい。
e. 寝転んだり、寄りかかることが多い。
f. 気が散りやすい。
g. 声の大きさや力の調整が難しい。
h. 集まりなどでじっとしていられない。
i. 歩行または走行で転びやすい。
j. 興味が移りやすい。
k. 食べこぼしが多い。
l. 衝動的な行動が見られる。 |
|--|

【手続き】対象児が在籍するクラスの担当保育士に以下の3点を依頼した。(1)全クラス児を気になる児、少し気になる児、気にならない児に分類する。(2)クラス児について、以下の12項目(表1)の「気になる行動」が保育中に見られるかどうかを回答する。(3)運動技能として、「はいはい」「片足立ち5秒」「両足ジャンプ」「どんぐりごろごろ」「一本橋を足を交互に出して渡る」の達成度を、「できる」「だいたいできる」「どちらかというてできない」「できない」「しない・分からない」の5段階で答える。回答結果をもとに、保育者が気になる程度と子どもが見せる気になる行動の相関性、気になると感じられる行動と運動技能の達成度(拙劣さ)との関連性の2点から分析した。

気になる幼児の運動技能と身体と感情のコントロールの拙劣さとの関連性

【対象】A県の保育園(3園)に在籍する2歳クラス児から5歳クラス児の215名と担当の保育士を対象とした。

【手続き】担当の保育士に以下の2点を依頼した。(1)児全員について、気になる行動(表1の12項目)が保育中に発現するかどうかを質問紙に回答する。(2)運動技能として、「はいはい」「片足立ち5秒」「両足ジャンプ」「どんぐりごろごろ」「go/stop」「一本橋を渡る」の達成度を、「できる」「だいたいできる」「どちらかというてできない」「できない」の4段階で答える。回答結果を基に、身体・感情コントロールの拙劣さの発現の様子から幼児を分類し、さらに、分類した各群について運動技能の拙劣さを調べ、分類の妥当性を検討した。

<参考文献>

1) 前田泰弘・小笠原明子・酒井幸子・守巧(2015) 幼稚園教諭が感じる気になる幼児の行動。保育教諭養成課程研究, (1), 41-49.

4. 研究成果

保育者が気になる幼児の行動の発達的特徴

KJ法による気になる行動の分類結果

幼児が示す気になる行動として挙げられた自由記述は、3歳児95件、4歳児81件、5歳児88件であった。これをKJ法により分類した結果、以下の14種類になった。

外界への気づき、かかわり方、感覚の特異性、気持ちのコントロール、こだわり、言葉のやりとり、集団からの離脱、衝動性、身体コントロール、多動性、発達、注意集中、イメージ変化への適応、その他

このうち「気持ちや身体のコントロール、注意集中、多動性、衝動性、感覚の特異性」を「セルフコントロール」とした。また、「外界への気づき、こだわり、集団からの離脱、イメージ変化への適応」を「環境への気づき・適応」に、「かかわり方、言葉のやりとり」を「環境とのかかわり」に分類した。

環境とのかかわりの拡がりからの分析

3、4、5歳すべての年齢で、セルフコントロールの拙劣さが大きく注目されていた(気になる行動のうち、3歳児で55.3%、4歳児で53.2%、5歳児で55.3%)。また、3歳児では次いで環境への気づき・適応への拙劣さ(27.7%)が、4、5歳児では、環境とのかかわり方の拙劣さ(4歳児で29.9%、5歳児で35.3%)が注目されていた。

考察

以上の結果から、気になる幼児の行動は、環境とのかかわりの拡がりの視点から整理することができた。また、気になる行動の多くは、セルフコントロールの拙劣さであることが分かった。さらに、保育者は幼児の加齢に伴い、環境への気づき・適応、そして、環境との適切なかわりの力が気になることが分かった。

保育者が気になる幼児の行動と運動技能の拙劣さの関連性

気になる程度と気になる行動の相関性

子どもを保育者が「気にならない子」「少し気になる子」「気になる子」の3群に分け、それぞれの子どもの見せる気になる行動の数を集計した。分散分析の結果、すべての年齢において「気になる子」>「少し気になる子」>「気にならない子」の順に気になる行動の数が多かった。これについて、Fisherの最小有意差法による多重比較を行った結果、5歳児の気にならない子と少し気になる子の差($p<0.05$)を除き、すべての年齢の各群間で1%水準の有意な差が見られた。

気になる行動と運動技能の達成度の関連性

方法で示した12項目の気になる行動を、身体コントロール(a, c, e, g, l, k)と感情コン

トロール(b、d、f、h、j、l)の拙劣さの観点から、それぞれ6項目ずつに分けた。それぞれの拙劣さと運動技能の達成度(拙劣さ)の相関性を年齢ごとに分析した。なお、運動技能の達成度は「できる」「だいたいできる」を「できる群」、「どちらかというとできない」「できない」「しない・分からない」を「できない群」とした。その結果、すべての年齢で感情コントロールの拙劣さと運動技能の拙劣さには、有意な相関性が見られなかった。一方、身体コントロールの拙劣さと運動技能の拙劣さの間では、3歳児の「一本橋を渡る」($r=0.445$)、5歳児の「両足ジャンプ」($r=0.404$)で有意な相関性が見られた。

考察

以上の結果から、保育士は気になる行動の発現が多いほど気になる子どもと認識する傾向があることが分かった。また、このような認識は、すでに2歳児クラスにおいてなされていることが分かった。なお、身体と感情のコントロールの拙劣さには相関性が認められなかったが、子ども個々が示す身体と感情のコントロールの拙劣さの諸相により、運動技能の拙劣さとの関連性が示されることが示唆された。

気になる幼児の運動技能と身体と感情のコントロールの拙劣さとの関連性

気になる幼児の分類

手続き(1)で回答を求めた気になる行動(12項目)を、身体コントロールの拙劣さ(a、c、e、g、i、k)と感情コントロールの拙劣さ(b、d、f、h、j、l)に分類し、各児の発現度数を算出した。この度数を標準化得点に換算しクラスタ分析を行った。その結果、全児は4群に分類できた(図1)。1群は46名、2群は128名、3群は26名、4群は15名であった。なお、係数が高いほど拙劣さが高い。

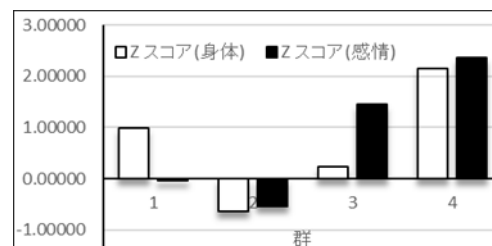


図1 拙劣さの発現の様子

各群の運動技能の拙劣さの特徴

各群の運動技能の拙劣さの特徴を明らかにするため、手続き(2)の運動技能(6種)の達成度を尺度として、一元配置の分散分析による群間比較と事後検定を行った。その結果「片足立ち」は、 $2 < 3 < 1 < 4$ の群順に得点が増加し(得点があがるほど拙劣さもあがる)群間に有意な差が認められた($p < 0.01$)。「ジャンプ」「どんぐり」「一本橋」は、「片足立ち」と同様に、 $2 < 3 < 1 < 4$ の群順に得点が増加し、群間に有意な差が認められた($p < 0.001$)。「go/stop」は $2 < 1 < 3 < 4$ の群順に得点が増加し、群間に有意な差が認められた($p < 0.001$)。一方、「はいはい」は $4 < 2 < 1 < 3$ の群順に得点が増加したが、群間に有意な差は認められなかった。

考察

手続き(1)の結果、1群は身体のコントロールが特に拙劣な群、2群は、身体・感情コントロールともに良好な群、3群は感情のコントロールが特に拙劣な群、4群は身体・感情コントロールともに拙劣な群であると考えられた。また、身体コントロールが比較的良好である2群、3群は運動技能も総じて良好であった。また、注意を要する課題であるgo/stopでは、身体コントロールが拙劣な1群より感情コントロールが拙劣な3群のスコアが悪いことから、感情コントロールの拙劣さが、運動技能の質を低下させている可能性が示唆された。このことから(1)で行った気になる幼児の分類は妥当性が高く、今後気になる幼児の運動技能を高める保育を計画・実践する上において、身体と感情のコントロールの状態の計測が客観的指標として有効である可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 3件)

前田 泰弘・小笠原 明子、保育者が気になる幼児の行動の発達の特徴、日本乳幼児教育学会第26回大会、2016。

前田 泰弘・小笠原 明子、立元 真、保育者が気になる幼児のセルフコントロールと気づきの拙劣さ、日本保育学会第70回大会、2017。

前田 泰弘・小笠原 明子、保育者が気になる幼児の運動技能と身体・感情コントロールの拙劣さの関連、日本保育学会第71回大会、2018。

〔図書〕(計 0件)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：立元 真

ローマ字氏名：Tatsumoto Shin

所属研究機関名：宮崎大学

部局名：大学院教育学研究科

職名：教授

研究者番号（8桁）：**50279965**

研究分担者氏名：小笠原 明子

ローマ字氏名：**Ogasawara Akiko**

所属研究機関名：長野県立大学

部局名：健康発達学部こども学科

職名：講師

研究者番号（8桁）：**50734117**

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。